

二〇一一年度国文学会彙報

二〇一一年度国文学会活動状況

△新人生歓迎会▽ 学生部会主催

二〇一一年四月五日(火) 紫苑館1F生協食堂

△国文学会総会・研究発表会▽

二〇一一年六月一九日(日) 寒梅館2F二〇三号室

・総会

・研究発表

松本清張の文学観——文壇との対立をめぐって——

ケリー・ダニエル(本学大学院博士課程前期課程)

壁の中の太陽

——大江健三郎「奇妙な仕事」の条件をめぐって——

辻野広彦(本学大学院博士課程前期課程)

『是害房絵』の構成と成立

久留島元(本学大学院博士課程後期課程)

国語教育の実践と課題

佐尾希(聖パウロ学園光泉中学・高等学校教諭)

△国文学会研究発表会・講演会▽

二〇一一年一月二三日(水) 寒梅館2F二〇三号室

・研究発表

『万葉集』安貴王の歌(巻四・五三四)をめぐる問題

櫻井ちひろ(本学大学院博士課程前期課程)

村上春樹における社会的なアンガジュマン

——『風の歌を聴け』をめぐって——

ピエパルンボ・マリア・テレサ

(本学大学院博士課程前期課程)

国語教育現場の実情と大学で国語・国文学を学ぶ意義

青木隆之(奈良育英中学・高等学校教諭)

・講演会

和歌の家・京都冷泉家

冷泉為人(冷泉家時雨亭文庫理事長)

△講演会▽ 院生部会主催

二〇一一年一〇月二六日(水) 彰栄館一番教室

外国籍の日本語作家

日比嘉高(名古屋大学大学院文学研究科准教授)

△文学散歩▽ 学生部会主催

・第一回 八月二四日(水)・二五日(木) 国文合宿および文学散歩

琵琶湖リトリートセンター、京都国立博物館、三十三間

堂

・第二回 一月三日(木) 嵐山文学散歩

二尊院、常寂光寺、野宮神社、天龍寺

・第三回 一月二三日(日) 今出川文学散歩

今出川キャンパス、白峯神社、相国寺

△ゼミ相談会▽ 学生会主催

一月二四日(月) ～一八日(金) 京田辺キャンパス

△同志社国文学▽

第七五号 二〇二一年一月二〇日発行

収載論文七編、資料紹介一編

第七六号 二〇二二年三月二〇日発行

収載論文六編、資料紹介一編

△国文学会会報▽ 第三九号 二〇二二年三月二〇日発行

二〇二一年度修士論文題目

『古事記』における「豊明」の問題 足立 一勝

『万葉集』における相手を表現する言葉

——「妻」と「妹」が並存する歌のあり方 櫻 井 ちひろ

を通して——

源氏物語の音楽についての研究

——琴と笛の演奏場面を中心として——

『源氏物語』における服色選択とその人物造

型への関わり

——「衣配り」と明石の君の服色変化を中

心として——

『宇治拾遺物語』「雀報恩事」考

『古今著聞集』巻第十五宿執第二十三の論理

昭和初年から二〇年にかけての文学言説にお

ける〈笑い〉

——井伏鱒二・または諸作品を光源として——

大江健三郎 作家元年の足掛フットホールドかり

——「政治」対「太陽族」の相克を踏まえ 辻野 広彦

て——

小林秀雄『本居宣長』の文学性 鈴木 淳子

二〇二一年度卒業論文題目

『古事記』木花佐久夜毘売神話の聖婚神話

——誓約の論理を中心に—— 西沢 祐貴望

「崇神記」の位置

—— 神代から受け継がれるもの ——

万葉集における農事を場とする望郷歌の在り方

伊田 隆太

芳賀 一祐

『万葉集』巻三 大宰帥大伴旅人讚酒歌十三

首における漢籍の受容

川畑 悠樹

大伴坂上郎女「神を祭る歌」(三・三七九)の考察

青木 成美

天平勝宝七歳防人歌の特徴

細川 亜由美

赤人の吉野讚歌第一群の解釈について

中村 優希

—— 反歌二首を中心に ——

海上女王との贈答歌からみる聖武天皇の相聞の一面

大八木 宏枝

春愁三首と依興歌をめぐる問題

吉岡 真由美

—— 短歌を中心に ——

『万葉集』における元旦儀礼の歌とはどのようなものか

—— 『万葉集』巻二十・四五一六番歌を中心に ——

吉崎 真人

『靈異記』の冥界訪問説話が問いかけるもの

戸田 美貴

—— 他界観の成立をめぐる ——

「竹取物語」における「月」と「光」

敗者の物語としての『伊勢物語』

武本 里華子

—— 「伊勢をの海人」の表現を起点として ——

市川 真千子

『伊勢物語』における螢

尾崎 真智

『落窪物語』の主題と構成

松原 理紗

和歌から見る定子像

吉澤 綾乃

『紫式部集』の羈旅歌

—— 二〇～二四、七一～七三番歌をめぐる ——

小野 塚裕

親子関係から見る夕霧の存在意義

天野 美奈子

『源氏物語』における垣間見

青木 真貴子

『源氏物語』の手紙

宮澤 悠樹

『源氏物語』における横川の僧都の役割

澤 恵里香

『源氏物語』における二条院と桜

柴田 亜香里

『栄華物語』における道長薨去の意味

増井 里美

『とりかへばや物語』の主題

森岡 彩

—— 宮廷出仕後における女君の「男性性」 ——

柴田 有理可

「貝合せ」の研究

酒井 会未

「虫めづる姫君」の主張

—— 宗教的解釈を通じて ——

安田悠子

年齢をめぐる歌

—— 民謡・中世小歌・和歌 ——

楠美香子

『今昔物語集』の性愛表現

岩田幸志

文学としての広告

宮下恵

『今昔物語集』における冥界往還説話

壁谷祐亮

—— 江戸時代のコピーライト ——

井上結衣

『建久御巡礼記』光明皇后湯施行説話

小林朱夏

未来記の方法

鎌池愛

—— 癡病者と仏教のかかわり ——

榊井恵理

近世文学における安倍晴明伝承の変容

山田恭平

『宇治拾遺物語』における武人と盗賊

松岡希和

お七像の変遷

山田恭平

—— 「袴垂、保昌に合ふ事」を中心に ——

松岡希和

—— 「放火」から「火の見櫓」への変化か
ら考える ——

山田恭平

『宇治拾遺物語』における笑い

山内彩香

黄表紙における〈蕎麦〉

日比野予咲

『古今著聞集』における後鳥羽院像

今野麦

西鶴武家物における女性

西村祐美

地名から見た『徒然草』

今野麦

—— 『武道伝来記』から ——

西村祐美

—— 京都の地名を中心に ——

今野麦

近松の時代物における身代り趣向

山根一成

『平家物語』における源頼政像

佐藤舞

—— 趣向の変化とその独創性をめぐって ——

山根一成

『平家物語』にみられる『狭衣物語』享受について

玉越雄介

『曾根崎心中』観音廻りに関する研究史

宮内健次

—— 小宰相と飛鳥井女君の比較から ——

玉越雄介

歌舞伎における「道成寺物」の意義

宮内健次

『風雅和歌集』における時間推移の「美」

山下香菜子

—— 『京鹿子娘道成寺』を中心に考える ——

藤江晃徳

歌語「さゆ」考

山田千紗子

『叶福助略縁起』における「江戸」

藤江晃徳

御伽草子「雀の発心」一考察

東田夕

—— 『両国菜』と比較して ——

森あおい

—— 内外から見るその独創性 ——

東田夕

—— 『両国菜』と比較して ——

森あおい

御伽草子「鉢かづき」考

国久笑美

—— 『両国菜』と比較して ——

国久笑美

『梅之与四兵衛物語 梅花氷裂』における

「金魚」の持つ役割

米田 友里子

——「乱中」を中心に——

『桜姫東文章』論

—— 絢交ぜの実態から登場人物を探る ——

中野 佳歩

お岩は何故産女姿になって現れたのか

曾我部 りりか

なぜ、お富が切られたのか

—— 「処女翫浮名横櫛」から黙阿弥の「書石田 有賀里

替」を探る ——

『江戸生艶気樺焼』の「事実」と「虚構」

—— 「艶二郎」の人物像をめぐって ——

玉野 理子

喜三二黄表紙における絵組構図の変遷

金 亜耶

近世文学における「影絵」

—— 「見訓影絵噺」に注目して ——

南川 紗友里

京伝黄表紙における「作者」像

—— 「京伝鼻」の作者から ——

伊藤 理恵子

山東京伝合巻における挿絵の効果

—— 『模文画今怪談』の利用に即して ——

有澤 知世

近世文学における「猫」

—— 曲亭馬琴作、黄表紙『猫奴牝忠義合奏』から ——

大藤 美怜

『八犬伝』における演劇の影響

—— 『仮名手本忠臣蔵』、『双蝶々曲論日

高尾 祥子

記』との比較を通して ——

円朝『怪談牡丹燈籠』の捉え直し

—— 山東京伝『浮牡丹全伝』の視点から ——

山田 千鶴

「たけくらべ」と明治の職業観

樋口一葉『われから』論

明治青年の挫折と創作小説からの離脱

—— 鷗外初期三部作を視座として ——

坂崎 恭平

『野分』から見る漱石の理想の「文学者像」

新聞小説「三四郎」の世界

—— 真実の判断を求められる読者 ——

佃 莉央

菊池寛『身投げ救助業』

—— 作品に見える時代の在り様 ——

村木 理羽

志賀直哉「城の崎にて」の死生観

神農 怜史

芥川龍之介「葱」

——通俗小説とそれを読む人々に対する芥川の思い——

板倉 めぐみ

新しい女の抹殺

——何故瑠璃子は殺されなければならなか

ったのか——

宮沢賢治と幻燈

——「雪渡り」を中心に——

宮沢賢治「かしはばやしの夜」

——清作と画かきの表裏一体性

谷崎潤一郎「少年」

——変化と逆転が引き起こす「少年」たち

の性の目覚め——

谷崎潤一郎『痴人の愛』における英語教育について

高田 裕美

江戸川乱歩「人間椅子」

——作品背景の特殊性——

江戸川乱歩「屋根裏の散歩者」

——当時の東京の社会問題と照らし合わせて——

南 勇次

江戸川乱歩「踊る一寸法師」論

——観客が語る浅草世界——

「一寸法師」における人形について

江戸川乱歩「芋虫」における時子の精神構造

夢野久作「あやかしの鼓」

——久作が表現した「あっけなさ」——

探偵小説としての「押絵の奇蹟」の真の意味

梶井基次郎「闇の絵巻」における光と闇

——「絶望への情熱」とドッペルゲンゲル——

吉屋信子と良妻賢母主義

——「わすれなぐさ」を中心に——

吉井勇「長谷詣」に見られる「日本」への憧憬

——

太宰が描いた「軽み」

《救済》の文学

——三島由紀夫『仮面の告白』

三島由紀夫「近世姑気質」論

——戦後の家族観を視座として——

内田百閒「由比駅」論

——

渡邊 大地

河北 祐里

菊池 健太

廣瀬 可奈

近藤 建

水谷 夏奈恵

森田 朋美

松井 佑生

新垣 遥

奥野 志穂

薬師神 奈緒

坂根 彩葉

物語り得ない戦時下の〈記憶〉

——武田泰淳「ひかりごけ」を読む

歴史小説としての「楼蘭」

大江健三郎「死者の奢り」と「奇妙な仕事」の「学生」

同時代の文脈と『個人的な体験』の帰納

——安保闘争のイメージ——

『他人の顔』における孤独

『カンガルー・ノート』におけるクレオール性

七瀬三部作におけるテレパシーの構図と時代背景の関係性

『道頓堀川』における土地と時代

村上春樹『鏡』論——全共闘小説としての『鏡』

村上春樹「かえるくん、東京を救う」における

る「機関車」の役割

飲酒というモチーフ

——江國香織作品を題材に

『満月の凶行』岩井志麻子『夜啼きの森』論

——新聞投書を資料として——

——京都市の三大家族三世代調査——

——

——

藤原 崇雅

角谷 直人

小川 聖也

小林 潤矢

村井 健

小川 知夏

中石 悠将

植城 文佳

竹重 龍太

佐藤 大祐

門田 桃子

馬場 麻衣子

歌謡曲における「自然」の語彙

——さくらを中心に——

辞書・雑誌・童話におけるオノマトペの特徴

中島みゆきの歌詞におけるイメージ

——形容詞を材料として——

『朝日新聞』における学年配当漢字のカバー率

——「政治」、「社会」、「経済」、「文化」、

「運動」面別に——

総選挙と解散名における新聞紙による命名

絵本とオノマトペ

日本語字幕と日本語吹き替えの違い

——映画『魔法にかけられて』——

多言語話者の言語とコード・スイッチングについて

「テ」形と連用形中止形の比較

丁寧体の使用実態からみる書き手と書きこと

ばの関係性

——新聞投書を資料として——

京ことばの語彙における崩壊及び残存の実態

——京都市の三大家族三世代調査——

——

栗津 菜摘

田中 秀昂

櫻井 真理子

浅田 祐介

平田 佑介

井上 薫

伊藤 友香

岩林 理沙

前田 賢吾

中森 千聖

中谷 友紀

ライトノベルの語彙・表記の特徴

新留 まど香

——ライトノベルと一般小説の比較から——
香川県小豆郡土庄町土庄地域における方言文

末詞の性差・世代差

高橋 里佳

——原生的文末詞「ナ」「ヤ」「ヨ」を中心に——

「キャンパスことば」と「学生語」の境界

——同志社大学キャンパスことばを通して——

吉田 早織

日本語における条件表現に関する研究

——「と、ば、たら、なら」の研究を中心に——

李 炳裕

「カナシ」系の語の用法をめぐって

——『源氏物語』『今昔物語集』の比較を通して——

中西 久美子

キリシタン資料の敬語接頭辞「御」について

——キリシタン書と排耶書の比較を通して——

高瀬 由衣

「豆腐」の仮名表記に見る開合の混乱

河野 絢子

動詞「あがる」の語史

——語義別出現頻度から見た多義化の過程——

中村 彩香